海外の森林

海外の森林・林業政策（ドイツから）

日時：平成２４年７月２９日（日）　１３：００～１５：００
講師：寺下　太郎（愛媛大学農学部准教授）

概況

ドイツの森林から学ぶ
講師：寺下　太郎

講義は、「ドイツの森林とは、どんな印象の森林か。その印象を絵に描いてほしい」という一言からはじまった。
続いて、「ESD（持続可能な発展のための教育）とは、何か」という質問が投げかけられた。そこには、「持続可能な発展のための教育」という言葉では納得できないという思いが隠されていた。納得できる表現は「素直に生きていける社会づくりのための学びあい」とされた。

本題に入る。ドイツの森林は、平地林である。日本の森林は、山林である。日本では山林から里山、里から都市へ、さらに海へと繋がっている。日本は生き物に対して優しい環境を持った場所と言える。しかし、山林は山林以外に使い道がない場所でもある。
ドイツの森林は、大都会の付近にある平地林である。その外側に農地がある。そのためにドイツの森林は、都市住民にとって親しむことができる場所である。この森林を支える制度に、フォレスターとマイスターがある。
ここで、KJ法による受講生の意見集約がなされた。受講生の様々な意見がある中で、フォレスターとは「林業を経営する人」とし、マイスターは「自分が作業できる技術を持ち、さらに人を育てることができる人」とされた。

林業は長い時間がかかる。人間の寿命をはるかに超えている。目先のマーケティングではなく、その森林をどうしたいのかを決めなければならない。林業は、自然力に頼るところが大きく、一旦決めたら修正がきかないところがある。ドイツでは、こうした考え方に基づき、地域の森林のあり方を国から任命されたフォレスターが経営を行っている。

多様な考え方は重要である。その一方で目的をもって学ぶことの重要性が強調された。